



UiPath 2018.3 Robot/Studio バージョンアップガイド

2018年11月

UiPath 株式会社

- 前提
- 製品のバージョンアップの順序と、可能な組み合わせ
- バージョンアップの手順
- バージョンアップ切り戻しの手順
- よくある質問
- 参考資料



前提

本説明の対象者と目的は以下のとおりです。

対象者

- これからバージョンアップを検討している企業、導入支援を行うパートナー企業の方
- UiPathのバージョンアップの計画を検討するシステム企画の方
- UiPathのStudio/Robot環境をセットアップする管理者の方/作業を実際に実行される方

目的

- UiPath 製品のバージョンアップをする際の正しい手順を理解する
- バージョンアップに必要な準備と実施内容を理解し計画を立てることができる
- バージョンアップ手順を作成し、実行することができる

本説明の対象範囲

本説明では、2016.2, 2017.1, 2018.1, 2018.2から2018.3へのバージョンアップが対象となります。また、Robot(Attended/Unattended), Studioが対象となります。Orchestratorは別の資料で説明されておりますのでそちらをご覧ください。

	バージョンアップ前バージョン		バージョンアップ後バージョン	本説明の対象
Robot/Studio	2018.2 2018.1 2017.1 2016.2		2018.3	対象
Orchestrator	2018.2以前のバージョン		2018.3	対象外 別資料でご説明



製品のバージョンアップの順序と、
可能な組み合わせについて

バージョンアップの順序について

弊社製品のバージョンアップは、次の順でご実施頂くことを強く推奨します。
続くスライドで、この理由についてご説明します。

1. Orchestrator をバージョンアップ
2. Robot をバージョンアップ
3. Studio をバージョンアップ

Orchestrator と Studio/Robot の組み合わせ (1)

Orchestratorと接続・動作保証されるStudio/Robotバージョンは以下の通りです。

		Orchestrator				
		2018.3	2018.2	2018.1	2017.1	2016.2
Studio/Robot	2018.3	OK	OK	NG	NG	NG
	2018.2	OK	OK	NG	NG	NG
	2018.1	OK	OK	OK	NG	NG
	2017.1	OK	OK	OK	OK	OK
	2016.2	NG	NG	NG	OK	OK

なお、Orchestrator と Studio/Robot のバージョンは、揃えてお使い頂くことを強く推奨致します。

Orchestrator と Studio/Robot の組み合わせ (2)

利用可能になる 18.3 の新機能は、Orchestrator と Studio/Robot のバージョンの組み合わせに依存します。必要な機能が利用可能となるように、バージョンアップをご計画下さい。

		Orchestrator	
		2018.3	2018.2以前
Studio/Robot	2018.3	フローティングロボットなど、2018.3の全ての新機能が利用可能です。	ロボットトレイのリサイズ/プロセス検索機能等、Studio/Robotのみの新機能のみが利用可能です。
	2018.2以前	設定した日時以降にスケジュールジョブを無効化する機能や、ダイナミックアロケーションなど、Orchestratorの新機能のみが利用可能です。	2018.3の新機能はご利用いただけません。

なお、Orchestrator と Studio/Robot のバージョンは、揃えてお使い頂くことを強く推奨致します。18.3 の新機能の詳細に関する包括的なリストについては、18.3 のリリースノートをご参照下さい。

Robot と Studio をバージョンアップする順序

一般に、より新しいバージョンの Studio で作成したワークフローを、より古いバージョンの Robot で実行することはサポート対象外となります。このような状況を避けるため、先に Robot をバージョンアップし、その次に Studio をバージョンアップして下さい。

ワークフローを		実行する Robot のバージョン	
		新バージョン	旧バージョン
作成した Studio のバージョン	新バージョン	サポート対象	サポート対象外
	旧バージョン	サポート対象	サポート対象



バージョンアップの手順

ハードウェア/ソフトウェア要件の確認

バージョンアップによって要件が変更になっている可能性がありますので、必ずホームページで最新のハードウェア要件、ソフトウェア要件をご確認ください。特に2018.3では.Net Framework 4.6.1が必須となる点にご注意ください。

	チェック項目	2018.3での主な要件の変更点
ハードウェア要件	CPU	参考資料の2018.3ハードウェア要件、ソフトウェア要件をご参考ください。
	RAM	
ソフトウェア要件	Windows OS	4.6.1が必須
	.Net Framework	

バージョンアップ作業全体の流れ

バージョンアップ作業の流れは以下のようになります。

1. バックアップ
2. アクティビティパッケージ退避
3. 設定ファイル退避
4. バージョンアップ実行
5. アクティビティパッケージ再配置
6. 設定書き戻し
7. 動作確認

各バージョンの製品のインストールディレクトリ

製品のインストールディレクトリは、Windows の bitness (x86/x64) と製品のバージョンにより異なります。

Windows OS bitness	製品バージョン	<製品のインストールディレクトリ> のパス
32bit (x86)	2016.2	%ProgramFiles%¥UiPath Studio
	2017.1	%ProgramFiles%¥UiPath Platform
	2018.1	%ProgramFiles%¥UiPath¥Studio
64bit (x64)	2016.2	%ProgramFiles(x86)%¥UiPath Studio
	2017.1	%ProgramFiles(x86)%¥UiPath Platform
	2018.1	%ProgramFiles(x86)%¥UiPath¥Studio

退避と再配置が必要なファイル・フォルダ

前バージョンの製品に同梱のアクティビティパッケージと各種設定ファイルです。

項目	説明	ファイル・フォルダの場所	バージョンアップ後のアクション
前バージョンの製品に同梱のアクティビティパッケージ	- NW接続がある端末では自動でダウンロードされるため必須ではないが、ローカルに配置した方が展開処理が高速になるため再配置を推奨。 - NW接続がない端末には、既存WFの安定稼働のため、新バージョンのインストールディレクトリ配下に配置が必須。 - なお 2018.3 からのバージョンアップ時には既存のパッケージは削除されず保持される動作となるため、この作業は不要。	<製品のインストールディレクトリ> ¥Packages¥*.nupkg 例: UiPath.Excel.Activities.*.nupkg, UiPath.Mail.Activities.*.nupkg など 注: 18.2以前のバージョンに同梱の Core アクティビティ (UiPath.Core.Activities.*.nupkg) に限っては、それが同梱されたバージョンの Studio とのみ動作可能であるため、これを新しいバージョンの Studio に配置しないこと。誤動作の原因となる。 なお 18.3以降に同梱の Core アクティビティについては、18.3以降の任意のバージョンの Studio で使用可能。	退避した .nupkg ファイルを、製品インストールディレクトリ配下の同じディレクトリにコピーする。 注: 新しいバージョンの製品に同梱の .nupkg ファイルを削除しないように、フォルダをまるごと置換するような操作は避けること。
前バージョンの製品インストールディレクトリ配下の.configファイル	- 種々の設定ファイル。 - 手動で変更していなければ、バックアップは不要。	<製品インストールディレクトリ>¥*.config 例: NLog.config, UiRobot.exe.config など	既定から変更された部分 (差分) を、新しい .config ファイルに手動で反映。 注: 設定項目が追加されている可能性があるため、ファイルを上書きしないように注意。

インストール後に設定ファイルをご自身で変更しているケースは様々ですが、変更されている可能性のある設定ファイルをご紹介します。設定内容の退避と設定書き戻しの際にご参考ください。

ファイル名	配置場所	主な設定変更例
UiRobot.exe.config	製品のインストールディレクトリ	• プロキシ設定
NLog.config	製品のインストールディレクトリ	• ログの出力設定
license.config	製品のインストールディレクトリ	• ライセンスの設定

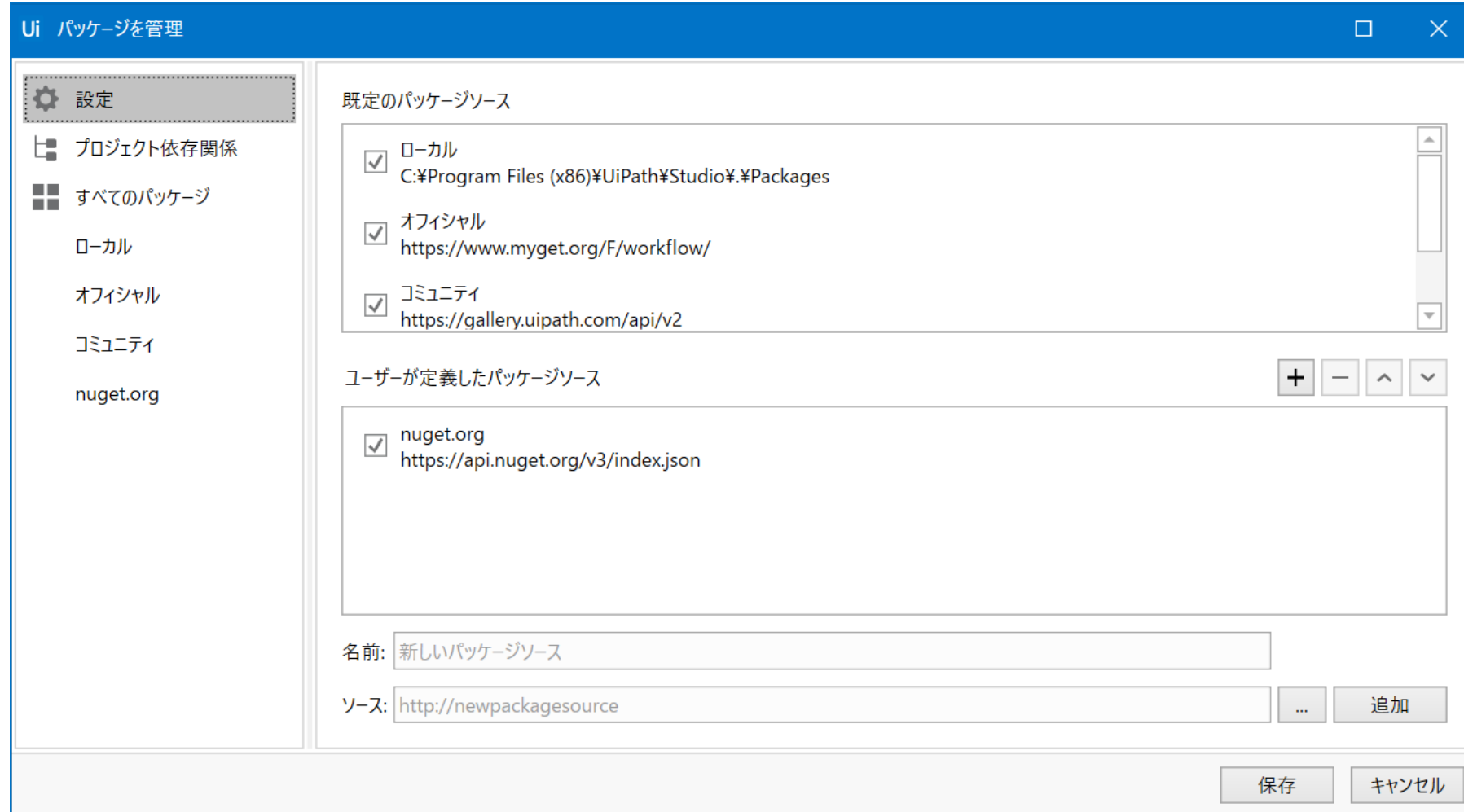
このほかの設定ファイル (NuGet.Config)

このほか重要な設定ファイルとして NuGet.Config があります。
これは、アクティビティパッケージのソースの場所を設定するファイルです。
Studio と Robot は、それぞれ別の場所にあるふたつの NuGet.Config を参照します。

ファイル名	配置場所	設定対象
NuGet.Config	製品のインストールディレクトリ (32bit OS) %ProgramFiles%¥UiPath¥Studio (64bit OS) %ProgramFiles(x86)%¥UiPath¥Studio	Studio/Robot (共有)
NuGet.Config	ユーザープロファイル配下の AppData %AppData%¥NuGet	Studio
NuGet.Config	システムプロファイル配下の AppData (32bit OS) C:¥Windows¥System32¥config¥systemprofile¥AppData¥Roaming¥NuGet (64bit OS) C:¥Windows¥SysWOW64¥config¥systemprofile¥AppData¥Roaming¥NuGet	Robot

補足: Studio におけるパッケージソースの設定画面

この画面で設定した内容は、先述のふたつの NuGet.Config に反映されます。



バックアップが必要なファイル・フォルダ

ユーザーが作成したワークフロープロジェクトについてです。

項目	説明	ファイル・フォルダの場所	バージョンアップ後のアクション
ユーザー作成プロジェクトのソースファイル (project.json や *.xaml などを含む)	アップグレードによって削除されることはないが、念のためバックアップを推奨 注: 右列には既定のフォルダを表示しているが、ここ以外にも任意の場所にプロジェクトを保存できることに注意	%UserProfile%\Documents\UiPath ¥<プロジェクトフォルダ>	(なし)
ユーザー作成プロジェクトをパブリッシュしてきたパッケージファイル (*.nupkg)	アップグレードによって削除されることはなく、また上行に記載のプロジェクトのソースファイルがあればパブリッシュして再現可能だが、パブリッシュすると付与されるバージョン番号が新しくなってしまうため、一元管理できるようにバックアップを推奨	%ProgramData%\UiPath\Packages ¥*.nupkg	(なし)

バックアップが必要なファイル・フォルダ

ユーザーのワークフロープロジェクトが依存するアクティビティパッケージの展開先についてです。

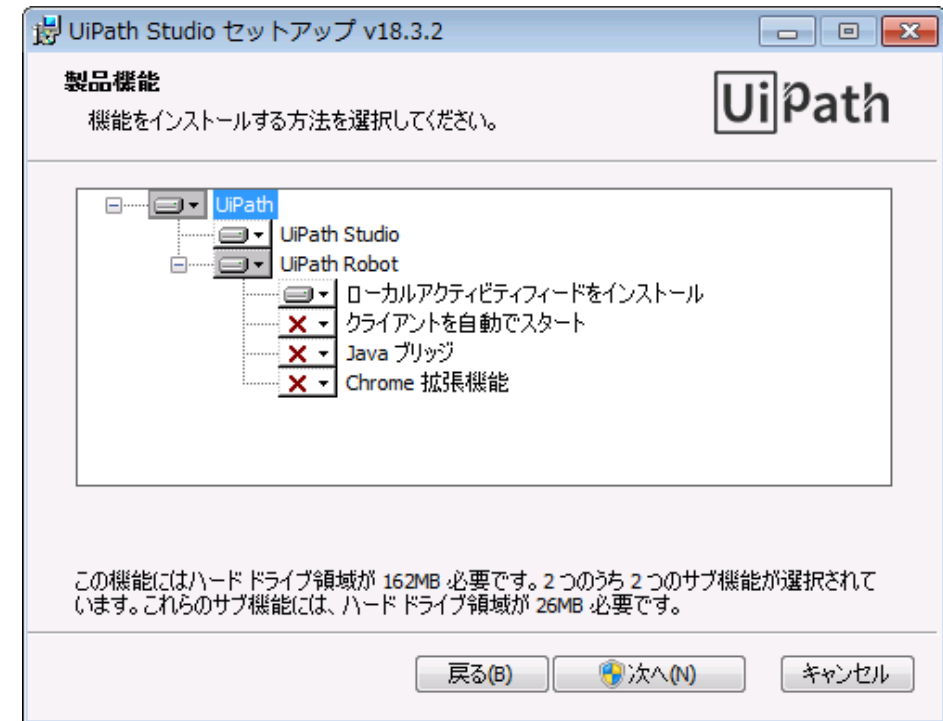
項目	説明	フォルダの場所	バージョンアップ後のアクション
展開された アクティビティ パッケージ	アップグレードによって削除されることはなく、また元のアクティビティパッケージ (*.nupkg) が利用可能であればワークフロー実行時に自動で展開される内容だが、念のためバックアップを推奨 注: %LocalAppData% と %UserProfile% のフォルダは、ユーザーごとに別の場所となることに注意	(v2016.2 の場合) %ProgramData%\UiPath\Activities (v2017.1 と v2018.1 の場合) %LocalAppData%\UiPath\Activities (v2018.2 以降の場合) %UserProfile%\nuget\Packages	(なし)

インストーラの起動

UiPathStudio.msi を起動し、バージョンアップを実行します。
2016.2, 2017.1, 2018.1, 2018.2 のいずれからでも、直接 2018.3 にアップグレードできます。
実行に際しては、ローカル管理者権限が必要となります。

詳細設定ボタンを押下すると、インストールする機能を選択できます。

- ローカルアクティビティフィードをインストール
アクティビティパッケージファイルをインストールします。
特段の事情がない限りは、インストールを選択して下さい。
- クライアントを自動でスタート
選択すると、UiPath Robot Tray が Windows の
スタートアップに追加されます。
- Java ブリッジ
- Chrome 拡張機能
それぞれ、Java アプリと Chrome を UiPath セレクターで
操作できるようにするためのプラグインです。
ここでインストールを選択しなくても、後で Studio の
ファイル -> ツールメニューから機能を追加できます。



インストール後の作業

UiPathStudio.msi で製品をバージョンアップした後は、次の作業を完了して下さい。

- 退避しておいた、前バージョンに同梱のアクティビティパッケージファイル (UiPath.Excel.Activities.*.nupkg など) の、UiPath.Core.Activities.*.nupkg を除いた全てを %ProgramFiles%\UiPath\Studio\Packages フォルダにコピーします。
- 必要に応じて、バックアップしておいた設定ファイルから必要なものを書き戻します。
- ロボットトレイを起動し、既存のワークフローパッケージを実行して、問題なく動作するか確認します。
- もしロボットトレイが赤く表示されている場合には、[Win+R]services.msc[enter] と入力し、起動したサービスウィンドウから UiPath Robot サービスを開始して問題を解消します。

補足: アクティビティ/ワークフローのパッケージ ファイルを格納するフォルダの構成

対象		2016.2	2017.1	2018.1	2018.2	2018.3
製品のインストールディレクトリ (以下、%InstallDir% と表記)		%ProgramFiles%\¥UiPath Studio	%ProgramFiles%\¥UiPath Platform	%ProgramFiles%\¥UiPath¥Studio		
製品に同梱の アクティビティ パッケージ	ローカルソース (*2) (.nupkg の配置場所)	%InstallDir%\¥Packages				
	展開先 (*3)	%ProgramData%\¥UiPath¥Activities	%LocalAppData%\¥UiPath¥Activities		%UserProfile%\¥.nuget¥Packages	
ユーザー作成の ワークフロー パッケージ	ローカルソース (*4) (.nupkg の配置場所)	%ProgramData%\¥UiPath¥Packages				
	展開先	%ProgramData%\¥UiPath¥Projects			%UserProfile%\¥.nuget¥Packages	

(*1) %LocalAppData% と %UserProfile% のフォルダはユーザーごとに異なることに注意

(*2) 前述の通り、バージョンアップ時にバックアップと書き戻しが必要となるパッケージファイルを含むフォルダ

(*3) 必要なアクティビティ/ワークフローパッケージが未展開である場合は、Robot がソースを検索して展開するため、バックアップの必要はない

(*4) ワークフローのローカルパブリッシュ先。手動でワークフローパッケージファイル .nupkg を配置することも可能

バージョンアップ切り戻し作業全体の流れ

バージョンアップ切り戻し作業の流れは以下のようになります。

1. 新しいバージョンの製品をアンインストール
2. 以前のバージョンの製品をインストール
3. バックアップした内容をリストア
4. ライセンスをアクティベーション
5. 動作確認

ご質問	回答
Studio/Robot をバージョンアップするとき、前のバージョンをアンインストールしてから次のバージョンをインストールすべきか？	いいえ。 前のバージョンをアンインストールせず、そのまま新しいバージョンのインストーラを起動することによりバージョンアップして下さい。 前のバージョンをアンインストールすると、本来引き継がれるはずの %ProgramData%UiPath 配下のユーザーワークフローパッケージファイルが消えてしまったり、その後に新バージョンをインストールした際にライセンスのアクティベーションが再度必要になるなどの不都合が発生します。
サイレントインストールは可能か？	はい。 .msi インストーラにサイレントインストールのコマンドラインオプションがあります。詳細は弊社の UiPath Studio ガイドをご参照下さい。 ただし、バージョンアップの際には、前のバージョンの製品に同梱のアクティビティパッケージをバックアップして、これを新しいバージョンの製品の環境に書き戻せるように、サイレントバージョンアップのためのスクリプト (バッチファイルなど) をご準備下さい。
Studio 2018.3 で既存プロジェクトを開くと自動でマイグレーション処理が実行されるが、既存プロジェクトを Robot 2018.3 で実行するためには、このマイグレーションと再パブリッシュは必要なのか？	いいえ。 このマイグレーションは、Studio 2018.3 で既存プロジェクトを修正したい場合にのみ必要です。既存のユーザーワークフローパッケージファイル (*.nupkg) は、そのまま Robot 2018.3 の環境で実行できます。

以下に本説明の参考となる資料を添付します。

- ハードウェア要件
 - Studio <https://studio.uipath.com/lang-ja/docs/hardware-requirements>
 - Robot <https://robot.uipath.com/lang-ja/docs/hardware-requirements>
- ソフトウェア要件
 - Studio <https://studio.uipath.com/lang-ja/docs/software-requirements>
 - Robot <https://robot.uipath.com/lang-ja/docs/software-requirements>
- サイレントインストールのためのコマンドラインパラメーター（スクリプト等で活用）
 - <https://studio.uipath.com/lang-ja/v2018.3/docs/msi-command-line-parameters>



Thank you!